

係学科の内容に反映していかなければならないと思う。

平成21年度 松原七中校区ターゲットスキル

	幼稚園	低学年	中学年	高学年	中学生
自己信頼					
共感性					
自己管理能力					
対人関係					
境界設定					
コミュニケーション力					
ストレス対処					
感情対処					
決断と問題解決					
創造的思考					
批判的思考					
情報活用力					

は人間関係学科を中心にして実施

は過渡的な取組として

はあそびと人間関係学科を中心にして

これまでの取組の概要

a) 平成19年度

平成18年度、大阪府の「子どもの未来ハートフルプロジェクト推進事業」の指定を受け、校区人権教育研究会で、松原七中校区の子どもたちの実態や課題を話し合い、子どもたちの現状や課題をふまえ、松原七中校区として『めざす子ども像』を設定した。その子ども像を実現していくための「人間関係づくりのための授業」づくりをめざして、「校区あいあいプロジェクト」を発足させた。その中で、幼・小・中11年間で獲得させたい12項目のターゲットスキルを設定し、「あいプロ12のスキル」として校区のターゲットスキルとしたのである。平成19年度、武庫川女子大学大学院・西井克泰教授、親和女子大学・新保真紀子准教授、マザー・アース・エデュケーション主宰・松木正氏を招聘した校区合同研修・公開授業（幼稚園～中学生が松原七中で行った）も含めた校区人研教育研究会を実施し、幼・小・中の人間関係学科（あいあいタイム・HRS）の授業づくりを本格的に始動させた。また、地域への発信という観点で、七中校区地域教育協議会予算総会で幼・小・中合同の教員劇を披露した。

2月に開催された文科省研究開発学校連絡協議会の研究協議において、文科省視学官（当時）・森嶋昭伸氏より、人間関係学科の指針を作成する

という研究課題をいただいた。

b) 平成20年度

平成20年度は、幼・小・中の連携をさらに強めていく取組を進めてきた。

一つ目は、授業づくりにおける学校間連携の強化である。恵我小・恵我南小の合同協議の場を設けたり、松原七中も含めて授業交流を深めてきた。春の校区人権教育研究会では、平成19年度よりも公開クラスを増やすとともに、研究協議も強化し、校区の課題を確認してきた。武庫川女子大学大学院・西井克泰教授に継続的に関わっていただき、恵我小、恵我南小での研究協議や春の校区人研教育研究会において貴重なご指摘や方向性の示唆をいただいた。2年目をむかえた「あいあいタイム」、6年目をむかえた「HRS」の恵我幼も含めた11年間での発達段階に応じた授業づくりという段階に到達していることを確認した。



二つ目は、校区ワーキングの設置である。「あいあいプロジェクト」を発展させ、「校区プログラム・ワーキング」「校区効果測定ワーキング」「校区実態把握ワーキング（報告冊子づくりも担当）」を発足させた。校内ワーキングの成果を代表者が持ち寄り、校区としての方向性を提示することとしている。不登校生等の支援においては、年2回の校区不登校生等支援会議を中心にして具体的支援策の交流を行ってきた。校区での不登校生等支援をさらに進め、校区で一貫した不登校生等支援をめざした。

三つ目は、上記の課題を推し進めていくための校区合同研修にも引き続き取り組んできたことである。弁護士・峯本耕治氏からは「不登校生等支援に関わる事例の数々とアセスメント（見立て）の必要性」を、マザー・アース・エデュケーション主宰・松木正氏からは、『ワークショップの「こころ」-「寄り添うこと」』を、ひとまちファシリテーション工房代表・ちょんせいこ氏からは、「ファシリテーションがうみだすエンパワメント」を学んできた。さらに、地域への発信として、松原七中校区地域教育協議会の予算総会では、前年度の幼・小・中の教員劇から地域の人たちとの合同劇へと発展できた。

そして、この校区での取組が大きく前進したのが平成20年11月14日に開催した研究報告中

間発表会（２年次）であった。主催者を含め６０名超（市外、府外からの参加約１５０名）の参加のもと、松原七中において、恵我幼稚園、恵我小学校、恵我南小学校、松原第七中学校の３校１園の９つの授業（各学年１、小中のコラボレーション授業１を含む）公開と全体会を行った。

公開授業については、恵我小・恵我南小の合同学年会議や、教員の交流授業を学校を越えた取組をふまえて実施した。中でも、校園間のギャップを埋めるために、恵我南小６年生、松原七中１年生による中学生が小学生を歓迎するという形でのコラボレーション授業や、恵我幼稚園の授業に松原七中２年生がファシリテーションリーダーとして子どもの援助に入るといったような取組を行った。

また、松原七中のボランティア活動の一環として、ガイドボランティアを募集し、中学生たちが参加者の皆さんや園児・児童の子どもたちを案内誘導する係として活躍し中学生の自己効力感を高めた。地域教育協議会の方々には、早朝から準備や、参加者の方々のための軽食や飲み物販売の協力をしていただいた。

全体会では、文部科学省初等中等教育局児童生徒課 生徒指導室生徒指導企画係長・須原愛記氏による全体講演、松原七中校区教員によるプレゼンテーション、武庫川女子大学大学院・西井克泰教授、大阪府教育委員会・古川知子氏、松原七中校区地域教育協議会会長・前田正人氏、松原七中教員の４者によるシンポジウムに取り組んだ。地域と学校が一体となった人間関係づくりをどう進めていくのかという問題提起と課題設定ができた論議であったと思う。

これまでの研究成果をまとめる一方、これから新たに人間関係づくりに取り組んでいこうとおられる教員の方々の松原七中校区への訪問や、様々な研究会、学習会への出張ワークや講演にも従来どおり力を注いだ。さらに、平成２０年１０月には校区研究開発のホームページを立ちあげた。

<http://www.e-kokoro.ed.jp/matsubara/matsu7/>

08koukukensatsu/koukuhyoushi.htm

このＨＰ作成を通じて、多くのものを得ることができた。まず、リンク集作成において、全国的な人間関係づくりの研究者や研究組織、大学、ＮＰＯなどの存在を知り得たということがある。次に、それぞれの場所で、どんな研究が進められ、実践が行われているかという全国的なレベルでの人間関係づくりの成果と到達段階を知ることができた

ことである。松原七中校区研究開発ＨＰを活用し、松原七中校区での取組と実践を全国的に発信していくとともに、情報収集の手段として大いに有効なものとなっている。

平成２１年になり、日本教育カウンセラー協会事務局長、東則孝氏のご助力を得て、東京理科大学教授・文科省視学委員・八並光俊氏と埼玉県上尾市立西中学校校長（当時）・清水井一氏から学ぶ機会を得た。そこで、学校教育における人間関係づくりをガイダンス・カリキュラムという概念で教科として位置づけて取り組むという貴重な観点をご示唆いただいた。

また、２月に行われた文科省視察において、文科省教育研究開発企画評価会議協力者・慶應義塾大学・伊藤美奈子教授より、人間関係学科を普遍化・一般化していくためのご意見をいただいた。

人間関係学科を、研究開発学校として研究開発の期間に実施するということにとどまるのではなく、新教科を実際に義務教育の中に成立させていくという、研究開発学校本来の使命を松原七中校区として実感しなければならない位置に来ていると言える。

ｃ）平成２１年度

本年度は、松原七中校区での研究開発学校の取組の最終年度である。この２年間を通じて、幼・小・中の連携は大いに進展した。小・小、小・中、幼・中の連携を柱にして進んできた。特に、小学校におけるカリキュラム作成においては、両小学校の合同学年会議や、全体のカリキュラム会議を経て、６年間を見通したカリキュラムが完成しつつある。ソーシャルスキル、出会いと気づきの学習、アサーティブな人間関係調整力のための学習を低学年・中学年・高学年と子どもの発達段階に合わせたものに仕上げていくための研究協議を積み重ねてきた。実際に、教員が交流し、お互いの子どもに関わり合う場面も多くあり、共通のものを土台としたカリキュラム作成が進行している。本年度末には、１１年間の人間関係学科実施のための指針とともに、１１年間の実施プログラムの完成をめざしている。

そのための布石として、本年度６月に校区人研教育研究会として、４回目になる幼・小・中が一堂に会した公開授業、講演とシンポジウムに取り組んだ。講演は、東京理科大学教授・文科省視学委員・八並光俊氏より、ガイダンス・カリキュラムとしての展望を語っていただき、シンポジウムには、武庫川女子大学大学院・西井克泰教授と松

原七中・糸井川孝之校長が加わり、松原七中校区人間関係学科に関わる展望と課題を、これまでのことをふりかえりながら、フロアからの発言も含めて確認することができた。

また、地域における人間関係づくりについても、本年度は、松原七中地域教育協議会予算総会において、幼・小・中合同ファシリテーションに取り組んだ。地域教育協議会に集う諸組織の中心メンバーが集う総会で、ファシリテーションに取り組むことができたということは、地域における人間関係づくりの進展において、大きな一歩を踏み出したと言える。

11月4日、松原七中校区（3校1園）における3年間の研究開発のまとめとして、研究開発学校最終発表会を松原七中において開催した。松原市外から142学校園・組織の参加をえて、校区3校1園の公開授業の後、7年前から本校校区の研究開発を見守って下さった大阪樟蔭女子大学学長・日本生徒指導学会会長 森田洋司氏からの講演をいただいた。また、シンポジウムにおいては、森田洋司氏のコーディネートのもと、武庫川女子大学大学院教授 西井克泰氏、奈良教育大学大学院教授池島徳氏、東京理科大学講師・前埼玉県上尾市立西中学校長 清水井一氏という現在の人間関係づくりの世界において第一線で活躍しておられる先生方に松原第七中学校区研究開発学校研究開発主任 深美隆司が加わり、これからの人間関係づくりをどう発展させ、全国に広めていくかという議論がなされた。

d) 人間関係学科の位置

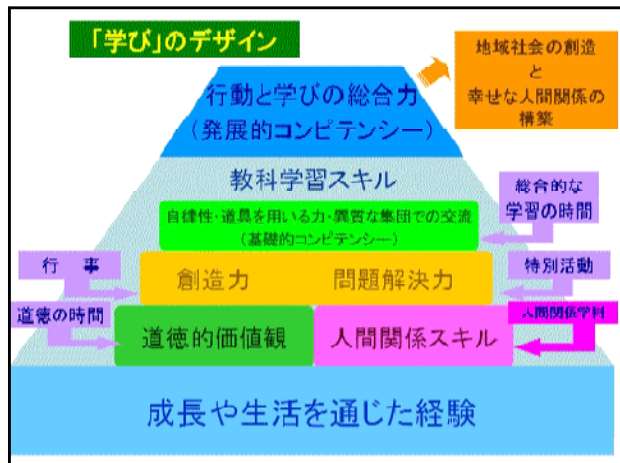
松原七中校区においては、松原七中校区ターゲットスキルは、道徳の時間における価値項目とほぼ同等の意味合いを持たせている。それは、人間の中に規範意識が成立するには、好ましいスタイルのコミュニケーションが不可欠であるという認識からである。道徳性というものは、道徳的心情・道徳的判断力・道徳的实践意欲と態度というプロセスを経て人間と人間関係の中で培われていくものである。もし、一人だけの世界が存在するのであれば、その世界の中には存在する一人の人間にとって守るべきルールもなく、迷惑をかける相手もなく、学ぶべきモデルもない。道徳の内容項目としてあげられているものを検証しても、すべての項目が人間の集団における人間関係の在り方や存在としての在り方に深く関わるものばかりである。一見人間関係とは関係ないと思われる小学校1・2年の「3-(1)身近な自然に親しみ、動植

物に優しい心で接する」「3-(3)美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ」という項目ですら、小学校3・4年では「3-(1)自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にする」「3-(3)美しいものや気高いものに感動する心をもつ」となり、小学校5・6年では、「3-(1)自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする」「3-(3)美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ」と発展し、中学校においては「3-(1)自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心もち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める」「3-(3)人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きる喜びを見いだすように努める」というように結ばれている。つまり、「自然」というものについては、「自然環境」「自然を愛護する」という自然に対する人間社会の在り方をあらわすものであり、「美しいもの」や「すがすがしいもの」とは「人間の弱さや醜さを克服する強さや気高さ」「人間としての生きる喜び」という社会に生きる人間としての在り方をもめざしているものであることがわかる。

また、新学習指導要領道徳の内容においては、中学校版で見てみると「悩みや葛藤等の思春期の心の揺れ、人間関係の理解等の課題を積極的に取り上げ、道徳的価値に基づいた人間としての生き方について考えを深められるよう配慮すること。」「学校や学級内の人間関係や環境を整えるとともに、学校の道徳教育の指導内容が生徒の日常生活に生かされる必要がある。」というように、人間関係に関わる記述が新たに挿入された。道徳の指導においては、人間関係づくりの課題を積極的に取り上げ、道徳的価値観の育成と人間関係づくりのスキルアップを同時に行わなければならないことを強調している。また、特別活動においては、「人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度」「望ましい人間関係」「自己及び他者の理解と尊重」という表記がなされている。つまり、人間関係づくりに関する授業があろうが、なかろうが、学校教育の中では、子どもたちの人間関係スキルを向上させなければならないことを明確に表しているのである。

松原七中校区人間関係学科ターゲットスキルは、道徳で表されている内容と価値項目のすべてにリンクしている。価値観の育成と行動スキルの育成とが相互に関係しながら、人間と人間関係の在り方を子どもたちの中に醸造させているのである。松原七中校区では、教育課程に人間関係学科

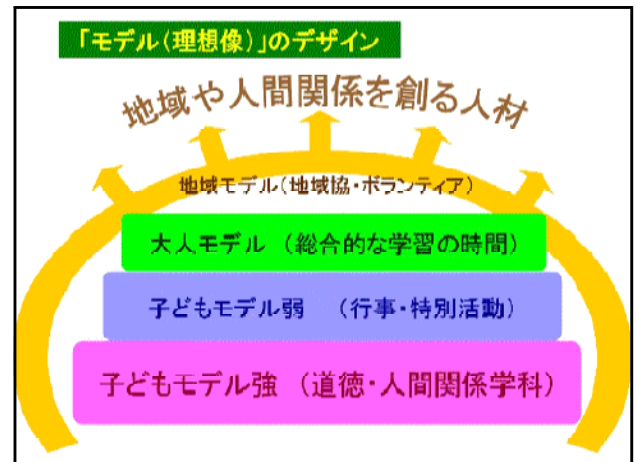
を位置づけていくために「『学び』のデザイン」を提起した。子どもたちの全ての学びの基礎となる「成長や生活を通じた経験」を土台にした価値観とスキルの育成ということで、道徳と人間関係



学科とは、学校の教育課程の中では、もっとも基礎的な部分に位置づけなければならない。そして、その上に、行事を含む特別活動を通じて、子どもたちの創造力・計画力・問題解決力を、実際の取り組みや、日々生起している問題に深く関わりながら育成していくことで、価値観の深まりや、人間関係づくりのスキルがアップされていくのである。そして、総合的な学習の時間においては、地域の様々な人と出会ったり、異年齢交流をおこなったりする。その中でも、特に、生き方や、職種の技能において、子どもたちに対する大人の模範、目標、理想像（これらを「大人モデル」と表す）となる姿を子どもたちに提示（出会う）することで、子どもたちが自らの将来像を描くことのできるステージをつくりだしているのである。また、子どもたちが、選ぶ（コース別等）、調べる、まとめる、発表する（プレゼンテーション）、共有するプロセスを通じて、道徳・人間関係学科・特別活動・総合的な学習・教科学習などを通じて学んできた個々の力を包括した力（基礎的コンピテンシー）として高めていくのである。そして、職場体験・松原七中校区地域教育協議会の活動・ボランティアなどを通じて、子どもたちが地域や社会へと出て行き、地域社会の創造と幸せな人間関係をつくっていくことのできる、行動と学びの総合力（発展的コンピテンシー）へとつながっていくことをめざしている。

そこで、子どもたちへのモデル像の提起として、「『モデル（理想像）』のデザイン」をあらわした。基礎となる道徳や人間関係学科においては、子どもたちに道徳的価値観や人間関係スキルというモデル性の強いものを提起する。つまり、手法

としては子どもたちをベースにおいたファシリテーションなのであるが、内容は、基礎的であり強固な人間としての在り方のモデルなのである。つまり、子どもたちに必要・不必要などという選択の余地はない。したがって、全く安全な環境のも

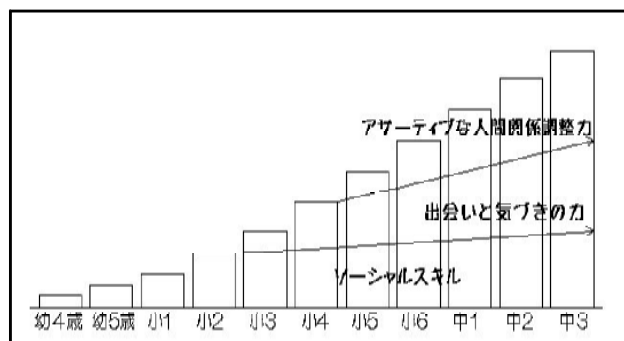


と、強いルールが存在の中で行われなければならないのである。だから、子どもたちの能力差が顕著に出るものであったり、競争のたぐいはなじまないものとなる。それが、行事や特別活動になると、子どもたちの自主性や個性を前面に出したもののへと発展させていくことになる。つまり、モデル性を弱めることで、子どもたちの企画力・実行力・問題解決力を日々の取組や行事などを通じて、生かし育てていくのである。そして、教科学習等と子どもモデルを生かした総合的な学習の時間に、大人モデルと子どもモデルの出会いがある。大人一人ひとりの生き方や仕事を通じて、子どもたちは理想とする大人像をめざすことができる。最後に地域で地域の発展のために頑張っている大人一人ひとりの集合体である地域モデルとの出会いになる。将来、子どもたちがどんな生き方をめざすのか、人間が幸せに豊かに生きていくために、地域や世の中ではどんな仕事や取組や組織が必要なのか、それが地域モデルなのである。このモデルとの出会いのプロセスを経て、子どもたちは地域や社会にしっかりと根づき、地域や人間関係をつくる人材となって、地域へ還っていくのである。そして、30年後には、地域のために生きていくことのできる大人となり、また教育へと関わっていく。そんな、プラスのスパイラルに満ちあふれた学校づくり、地域づくりを私たちはめざしていきたいのである。

e) 人間関係学科の要素

人間社会における基礎となる習慣（あいさつ、声かけ、聴き方、マナー等）について、楽しみな

がら学んでいくソーシャルスキルトレーニング。自分の中で自らと出会い、他人と出会いこころをふれあうことで、自らの気づきや成長を確認する出会いと気づきの力。攻撃的でもなく、受け身的でもない、相手を理解しながら自らの主張を行うというアサーティブなあり様に基づいて、問題やもめごとを解決するための人間関係調整力（メデュエーション）を養うロールプレイング。この、ソーシャルスキル、出会いと気づきの力、アサーティブな人間関係調整力を人間関係学科における学びの3要素として考えるのである。



f) 人間関係学科の核（コア）

では、人間関係学科において、中心に据えているものは何かということである。人間の発達におけるプロセスの核と言ってもいいと思うのであるが、それは、「認知」「評価」「行動」である。まず、認知であるが、「自分が何者で、どういう状態なのかということ、自らが認識する」という概念である。メタ認知とも呼ばれることもあるが、この認知が出来るか出来ないかということは、人間の成長にとって大きな影響がある。反省したり、目標を立てたりするには欠かせない力である。失敗を成功のもととしたり、同じ間違いを繰り返さないという行動の源はこの力によるものである。主に、コミュニケーションをつうじて、まわり（他人）を鏡（フィードバック）とすることにより、この力の積み上げが行われる。次に、「評価」であるが、これは、「感じ方」という意味である。ものごとに対するとらえ方というものであるが、前述したイラショナルピリフは好ましくない「感じ方」をあらわしたものである。この感じ方自体を変えていく作業はリフレーミング（他にはパラダイムチェンジとか）と呼ばれている。この「好ましくない感じ方」を「好ましい感じ方」に変えていくために、モデリングなどで新しい概念を提起したり、自己開示を通じて、子どもたちが感じ方を相互交流していくことで、気づきへとつながり、変化を及ぼすのである。そして、最後は

「行動」である。人間はそもそも、理想と実態というものは、乖離している場合が多い。「言っていることと行動とがちがう」ということなど、普段よく教員が現場でよく使う言葉である。こんな表現は子どもに対して否定的に使われることが多いのであるが、この「言っていること」に焦点をあてるのである。好ましい「行動」をとるにはどうすればいいか。これをロールプレイングの手法で取り組むのである。好ましい行動とは、いったいどんな行動なのか、教員のモデリングを材料にして、子どもたちは普段の生活に好ましい行動を取り入れた台本づくりに取り組む。そして、実際にそれを演じてみる、するとその中で、普段の否定的な行動を通じての感じ方とはちがった好ましい行動の結果としての「好ましい感じ」を体験するのである。この「好ましい感じ」が子どもたちの行動に影響を与える。ほんの一部でも、好ましい感じ方を行動にあらわし、ロールプレイングにおける好ましい感じの何分の1かを感じ取ることができれば、それは自分の行動における好ましい行動への認知へと繋がっていくのである。

「認知」「評価」「行動」の結果が三位一体となり、子どもたちの成長へとつながっていく。その繰り返し、11年間の人間関係学科の核（コア）であると言える。

g) 校区外への発信と連携

研究の経緯の項目にもあらわしているように、松原七中校区から、校区外へ出張ファシリテーションとして出ていく機会が非常に多くなった。平成21年の夏期休業中だけでも、上述の泉南市教育委員会を含めて7回、校区として出向いていった。それぞれの場所で感じたことは、参加されている先生方の熱意とニーズである。いわばファシリテーターとしての素人である私たちのワークショップを、温かく迎え入れて下さり、一回たりとも、場が落ちた状況をどうにかしようと、あくせくしたり慌てたりすることなく、進めることができた。学校現場では、本当に子どもたちの人間関係スキルの不足に悩んでいるし、そこから発生する諸問題が現場を苦しめている。そんな状況を変える一助にでもなれば・・・という先生方の期待感を非常に感じるのである。

現在、ガイダンス・カリキュラムということで、取り組んでいる中学校区、教育委員会、教育研究所（教育センター）、NPOなどが多数存在している。私たちは、全国で人間関係づくりを学校教育に教育課程として位置づけるために頑張ってお

られる方々との連携をより深め、一日でも早くこの取組が教科として成立していくための条件づくりを、教員の養成課程の課題なども含めた長期的な展望に立って進めていかなければいけないと思っている。

また、大きな方向性に関わって、大阪樟蔭女子大学学長、森田洋司氏の提唱している市民性教育や、ユネスコスクールとして取り組まれているESD（持続発展教育）における人間関係づくりの位置づけ等も明らかにしながら、研究開発をより発展的に進めていきたい。

2) 松原第七中学校

目標

松原七中では、平成15年度から平成17年度までの研究開発において、世界保健機構(WHO)のライフスキルを基礎にして人間関係学科(HRS)のプログラム開発を行ってきた。一つひとつのワークにターゲットスキルを定め、明確に獲得目標を設定した。そして複数の授業からなるパッケージ方式をとり、子どもの状況や実態に応じて臨機応変にパッケージの入れ替えで対応できるようにした。

ストレス対処から自己肯定感の育成へと進んでいった流れを引き継ぎ、今回の研究開発においては、人間関係学科(HRS)を中心にした教育活動を通じて、子どもたちに社会的有用感をいかに身につけさせていくかということが課題となっている。校内の生徒会活動、地域のボランティア活動、保育所・幼稚園・小学校の子どもたちとのブリッジ等、自己肯定感の獲得から社会的有用感の獲得へつなぐことができるプログラム開発、カリキュラムづくりが、子どもたちの成長から要求されているといえる。

今回の研究開発の目標設定において、これまでのWHOの10個のライフスキルを、更に『高次の、様々な文脈を通じて通用しうる「ジェネリックスキル」』（平成18年5月大阪府ハートフル推進事業連絡協議会における大阪樟蔭女子大学学長、森田洋司氏の講演より）として設定し、これまでのプログラムの再編成、ターゲットスキルの読替作業を進めていく段階に入っている。本年度は、ターゲットスキルの高次化への移行期間としてとらえ、従来設定してきたWHOのライフスキルを基礎としたプログラムをもとに、ジェネリックスキルを基礎とした授業をどう関係づけて取り入れていくかということを、その理解とともに進

めてきた。次の表は、WHOの10個のライフスキルとジェネリックスキルを関係づけたものである。

WHO ライフスキル	ジェネリックスキル
自己認識 共感性	自己信頼
共感性	共感性
対人関係スキル	自己管理力
	対人関係
	境界設定
効果的コミュニケーション	コミュニケーション力
意志決定 問題解決力	決断と問題解決
ストレスへの対処	ストレス対処
情動への対処	感情対処
創造的思考	創造的思考
批判的思考	批判的思考
	情報活用能力

3) 恵我小学校・恵我南小学校

あいあいタイムの取組

小学校では、松原七中の取組に学びながら、「あいあいタイム」のプログラム開発を行ってきた。中学校同様子どもの状況や実態から出発し、一つひとつのワークにターゲットスキルを定め、複数のワークからなるパッケージ方式をとっている。

a) 4つの「あい」

あいあいタイムの「あい」は、

[1]人を愛する（大切にする）の「愛」

[2]自分を大切にする「エ」

[3]相手（周りの人）を大切にする「相」

[4]助け合い・支え合いの「合い」

という4つの「あい」と位置づけ、授業の始めに、子どもたちと確認してから授業を始めている。

b) ソーシャルスキルトレーニング

小学校では低学年中心に、対人関係・コミュニケーション力をターゲットスキルとした、対人関係スキルのワークを系統立てて実施する方向で、取組を進めている。その内容は下記の通りである。

ソーシャルスキルトレーニング（小学校）

低学年	あいさつ・自己紹介 相手の話を聞く 仲間の誘い方、入り方
中学年	あいさつ・自己紹介 温かい言葉かけ

	気持ちを分かった働きかけ
高学年	あいさつ・自己紹介 優しい頼み方、断り方

c) 自己肯定感の育成

小学校でも、自己肯定感の育成が、大きな課題となっている。自己肯定感の育成には、自分を好きになる、自分に自信を持つとともに、まわりの人たちに認めてもらう、まわりの人たちを好きになることが重要である。そこで、全学年が特にクラス替えのある1学期に、自分や友だちのいいところ探しを中心としたワークに取り組んでいる。

d) ストレスマネジメント

小学校でも、様々なストレスを感じ、それをうまく対処できない子がいることから、特に中学年以上で感情対処・ストレス対処の授業の必要性が出てきている。そこで、下記のような流れで系統立てて取り組んでいるところである。

3年	感情に気づく イライラのコントロール
4年	イライラのもとを知る 気持ちを落ち着かせる方法を知る
5年	ストレスとは何かを知る ストレスの対処法を知る
6年	ストレスの構造とその流れを理解する ストレスの対処法を知る

e) 出会いと気づきを大切にしたいグループワーク

高学年になると、時間管理、決断と問題解決、計画性、情報活用力などのターゲットスキルをねらいとした授業にも、取り組んでいる。その際、小グループで、一体感・達成感を持たせながら、子どもたちの気づきを大切にする。また、それを出し合う中で、ねらいを共有できることを大切にするなど、ほぼ中学校に近い形で授業を行っている。

f) シェアリングを大切に

特にこの間論議されてきたのは、子どもたちのふり返りをどうシェアリングさせるかということである。ひとつは、ふり返りをワーク実施後できるだけ早いうちに写真も含めて掲示物にして、教室に貼るようにしている。それだけでなく、より深い気づきを導くように、中間シェアリングを設けたり、その場の意見を少し出させてから、ふり返しシートに書かせたり、全員発言をめざしたり、状況に応じて様々な方法に取り組んでいる。

g) 楽しいと実感できるワークショップに

「あいあいタイムは楽しくて何か発見がある」と子どもたちに感じさせたい。そのために、様々な知恵を絞っている。教員の登場の仕方、興味を引く場の設定、教材教具等…。そして、教員も一緒に楽しんで取り組むことを大切にしている。

h) 小・小連携の進展

平成21年3月には、両小学校で積み上げてきたプログラムを持ち寄り、モデルとなる1年間の「あいあいタイム」のカリキュラムを作成した。平成21年度はそれを元に実践を行なっている。

また昨年度から、研究発表会に向けて、夏休み中から両校の合同学年会を持ち、指導案検討を行ない、全く同じパッケージの授業に取り組んでいる。先行して授業を行う学年が授業の様子を詳しく相手校に伝えたり、プレ授業を相手校に見に行ったり、相手校に授業をしに行ったりしている。